

## 座談会

### 「立教オルガン物語」

立教学院には池袋キャンパスの諸聖徒礼拝堂、立教小学校の諸天使礼拝堂、新座キャンパスに聖パウロ礼拝堂の三つのチャペルがあり、それぞれにパイプオルガンが備えられています。このたび、池袋の諸聖徒礼拝堂と新座の聖パウロ礼拝堂に新しいパイプオルガンが導入されることになりました。両者ともに2013年度中に整備、完成する予定で、導入計画は「立教学院オルガン委員会」が推進してきました。その委員会の中心メンバーである「立教大学教会音楽研究所」の皆様、パイプオルガンについてお話を伺いました。また、オルガンと深いかわりを持つ学生キリスト教団体「立教大学オーガニスト・ギルド」と「立教学院諸聖徒礼拝堂聖歌隊」の活動内容をご紹介します。

#### 座談会参加者



#### スコット・ショウ

(教会音楽研究所副所長、文学部教授、立教学院教会音楽ディレクター、立教学院諸聖徒礼拝堂聖歌隊長)



#### 崎山 裕子

(教会音楽研究所所員、キリスト教学研究科兼任講師、立教学院オルガニスト)



#### 高橋 輝暁

(教会音楽研究所所長、文学部教授、立教学院オルガン委員会委員長)



#### 上田 亜樹子

(教会音楽研究所所員、チャプレン)



#### 長野 香

(立教学院企画部広報課/司会)

## 日本のオルガン文化を担う立教

○長野 立教学院オルガン委員会委員長で教会音楽研究所所長でもいらっしやる高橋輝暁先生、まずは現在ある二つのパイプオルガンの特徴と、今回新しく整備することになったきつかけや経緯などについてお話しただけですか。

●高橋 立教学院は、イギリス聖公会、つまりアングリカン・チャーチの系統をひくアメリカ聖公会のウイリアムズ主教によって百三十七年前、現在の築地に英学と聖書を学ぶ学校として設立されました。大学にはそれぞれ建学の精神というものがありますが、立教大学は「キリスト教に基づく教育」を掲げて日々の活動と教育にあたっています。聖公会関係の大学や学校は日本にいくつかありますが、その中でも立教学院は中心的な存在で、最も規模の大きな教育機関です。聖公会の大きな拠点と言ってもいいと思います。

その立教学院のチャペルでは、聖公会に基づく礼拝やさまざまなキリスト教の行事が行われています。池袋キャンパスの諸聖徒礼拝堂には一九二〇年代からパイプオルガン（以下、オルガン）が設置されていました。立教学院は日本におけるオルガンの設置に関しても、先進

的な役割を果たしていたと言えます。諸聖徒礼拝堂に設置されている現在のオルガンは、一九八四年に導入されました。

新座の聖パウロ礼拝堂は、戦後、一九六〇年に高等学校が新座キャンパスに移転したのに伴い、一九六三年に建設され、ヴァルカー社のオルガンが当時から使いつづけています。

オルガンは基本的に非常に長く使える楽器です。きちんとメンテナンスをしてゆけば、パイプはほとんど半永久的に鳴り続けるのですが、その他の機械的な部分は一種の消耗品なので、時々交換や調整が必要です。諸聖徒礼拝堂のオルガンは設置から二十五年以上たち、そろそろ部品単位まで分解して清掃、再組み立てを行い、その性能を



新座・聖パウロ礼拝堂のヴァルカー・オルガン



維持するためにオーバーホールという作業をしなければならぬ時期に来ています。聖パウロ礼拝堂のオルガンは、導入して半世紀近くたちますから、さまざまな不具合が生じてきています。こちらのほうは、構造的に現在の利用状況と必要性に対して十分には対応できなくなっています。しかも、パイプの一部や構造体の全部の交換を含む大がかりなオーバーホールが必要で、新しいオルガンを入れるのと同じくらいの費用を見込まねばならないことが分かりました。

さまざまな調査の結果を受け、オルガンを今後どのよ

うに維持していくかの抜本的検討を加える中で出てきた答えが、聖パウロ礼拝堂のオルガンは交換したほうがいいということでした。「戦後」といわれた時代に導入したオルガンなので、品質面や設置の仕方、そして設置後のメンテナンスにおいても、さまざまな制約を受け、本来の耐久性を保持できなかったのです。現在行われている礼拝を、音量で支えきれない現状も新しいオルガンが必要とする大きな理由です。明治学院でも同時期に同じヴァルカー社のオルガンを白金キャンパスのチャペルに導入していたのですが、二〇〇九年に新しいオルガンに入れ替えられました。

諸聖徒礼拝堂のオルガンは、ドイツのベツケラート社製の非常にいいオルガンで、メンテナンスをきちんと続けていけば今後も長く使っていける楽器です。ただ、立教学院は聖公会の学校ですから、礼拝などは聖公会のやり方に従って行われています。その中でオルガンは聖歌隊の伴奏という重要な役割を担っているのですが、ドイツ製のオルガンは、ドイツの古典的な音楽、例えばバッハなどの音楽を演奏するには大変優れているものの、イギリスやアメリカの作品を頻繁に歌う立教の聖歌隊の伴奏には必ずしも適さない面があるのです。

ここで、池袋キャンパスにおける現在のオルガンの使

用状況をお話ししましょう。二〇〇九年四月には、大学院にキリスト教学研究科が開設され、オルガン演奏法が正課授業に組み込まれています。また、チャペルでのオルガン演奏奉仕を主な活動目的としている立教大学オーガニスト・ギルド（以下、オーガニスト・ギルド）という学生団体がありますが、この団体が数年前から著しく成長し、メンバーの学生の数も大幅に増えています。一方、かつて立教学院にあった教会音楽学校の伝統を引き継ぐ教会音楽研究所では、一九九八年の設立時からずっとオルガン講座を開いてきており、聖公会の枠を超えて、日本各地の教会でオルガン演奏をする方々を養成し、また練習を通じた演奏技術向上の機会を提供するとともに、個人的にオルガンに関心のある方々を受け入れて、オルガン演奏の普及にも努めています。本格的な演奏にも対応できるオルガンを備えているのが諸聖徒礼拝堂だけという現状では、こうした活動をすべて支えるのは、不可能になっています。

この現状を踏まえ、諸聖徒礼拝堂と聖パウロ礼拝堂にそれぞれ新しいオルガンを導入することが決定されました。すでにオルガン製作を依頼する会社も決まり、具体的な設計が進んでいる段階です。さらに長年の懸案だった新チャペル会館（仮称）建設が決定し、そこに諸聖徒

礼拝堂のベッケラート社製オルガンを移設することになりました。チャペルのほかにもう一カ所オルガン演奏のできる場所が確保されることになったのです。二〇一三年に三台のオルガンがそろえば、オルガン演奏の機会が不足している問題が改善されます。そもそもオルガンの練習には、聖公会の礼拝音楽かどうかを問わず、バッハなどのバロック音楽も欠かせません。池袋キャンパスでは、聖公会の礼拝に適した新しいオルガンを諸聖徒礼拝堂で、またバッハなどのバロック音楽については移設さ



池袋・諸聖徒礼拝堂のベッケラート・オルガン

れたベツケラート社製オルガンを新チャペル会館（仮称）で利用できますから、立教大学で演奏、練習できるオルガン曲のレパートリーの点でも、聖公会系の音楽からロマン派やドイツの音楽まで非常に幅広くなります。

## キャンパスにチャペルの空気を伝える

### オルガンの調べ

○長野 学校のチャペルにこれだけ立派なオルガンがあるということ自体、素晴らしいことですが、これは立教大学がキリスト教に基づく教育を建学の精神としているからにほかなりません。オルガンはチャペルで行われる礼拝と切っても切れない関係にあります。大学におけるチャペルと教会音楽の役割を、上田亜樹子チャプレンはどのようにお考えですか。

●上田 私は音楽の専門家ではありませんが、チャプレンという立場から、新しい二台のオルガンがチャペルに導入されること、そして、今まで使っていたオルガンが移設されてまた新しい働きを担おうとしていることにとっても感動を覚えています。

そもそも立教大学にチャペルが存在する目的は、チャペルを拠点としてキリスト教の宣伝をし、ひとりでも多

くの学生を改宗させる、という点にあるわけではないことは明白ですが、キリスト教という信仰の形態や人々の生き方を通して表現される目に見えない世界、人として普遍的なものをすべての学生、教職員に提供する場、というのが私にとつてのチャペルの位置づけです。教育機関として知性を磨き心身の安定を図る目的にプラスして、人としての品性を涵養すること、この世にどう適応するかではなくて、質の高い人生とは何かを見分ける洞察力のある人を育てる、チャペルは、そういう意味でのひとつのセンターであると考えます。

そのようなチャペルの重要な活動のひとつである礼拝は、教会音楽と切り離せない関係にあります。聖歌隊とオルガンが一体となって礼拝を支える聖公会の伝統の中で、教会音楽は、アクセサリのように取り外しが可能な部品ではなく、最初から音楽は礼拝と一体で不可欠な要素だったと考えて良いと思います。現在も年間を通して礼拝が行われていますが、授業期間内には池袋と新座を合わせて週十八回の定例礼拝があり、そのうち十回は音楽とともに捧げられ、主にオーガニスト・ギルドの学生たちが奏楽を担当しています。礼拝のためにオルガンを弾くということは、文字どおり忠実に弾くことは最低限のこととして要求されますが、当然それ以上の

上田 亜樹子



ことが満たされないと演奏は務まらないでしょう。演奏時には、単に伴奏をするだけでなく、一緒に礼拝をつくり上げていくチームとしての覚悟も必要です。学生の活動ではありますが、立教のチャペルは音楽大学でもなかなか学べないことを提供していると言えるでしょう。

キリスト教に初めて触れる人も歓迎されていると感じていただけるような礼拝を、クリスチャンではない学生や教職員とともにつくっていくのは、なかなか至難の業ですが、これこそ立教が目指すべきことではないかと思えます。また礼拝だけでなくチャペルコンサートに参加

したり、さまざまなキリスト教の音楽に接することでも、キリスト教とは直接縁のない方や、宗教を敬遠しておられる方が、チャペルの活動を身近なものとして感じてくださるようになったらと願っています。

● 崎山 チャペルで特筆すべきは、結婚式ですね。学生時代には一度も足を運んだことのないような卒業生が、「やっぱり立教のチャペルで結婚式を挙げたい」と言って、一年前に予約をし、ものすごい倍率をくぐり抜けて当選し、式を挙げていますよね。

● 上田 結婚式もそうですし、それから体育会のユニフォーム推戴式なども、そこに集まった方がお祈りや音楽を通じて、いつのまにか目に見えない世界、普遍的な世界に触れる場に参加するということですし、この世とは全く異なる価値観があることを感じていただけるチャンスだと思っています。

● 高橋 立教のシンボルとして赤レンガの建物がありますが、クリスマスシーズンになると、ツリーの点灯の见物にたくさんの方がキャンパスの正門前に集まります。池袋は正門から右側、新座は正面に必ずチャペルが見えますね。チャペルがあつてこの立教大学のキャンパスができていくことが重要です。在学中に特に意識せず、その前を通っていただけでも、あるときふと、チャ

ベルが自分の生活、自分の気持ちを支えているものだったと気付くことがあるかもしれない。それでいいのだと思います。聖公会の信仰やキリスト教、チャペルの存在もっと具体的に言えば、オルガンの音色も、これから長い人生を生きていく若い人たちにとって支えになり、励ましになる、ある種の象徴だと思うのです。やはりチャペルは立教になくてもはならないものです。チャペルは、そういう存在としてこれまでも十分に役割を果たしてきましたが、これからもそうあり続けていかなければならないでしょうね。

●崎山 その意味でも、美しいオルガンの音が加わって、訪れた人に感動を与えるようなチャペルになってももらえたらいいなと思っています。見たり聴いたり、五感に入ってきたものは、特別な深い感動を残してくれるでしょうから。

## 欧州のオルガン事情

○長野 教会音楽というと、一般的には欧米、特にヨーロッパを思い浮かべる方が多いと思います。例えばヨーロッパの国々では、どんなに小さな町でも中心には必ず教会があつて、日常的にオルガンや聖歌隊の練習があつ



崎山 裕子

たり、コンサートが開かれたりしています。オルガニストの崎山裕子先生はスイスやアメリカに留学のご経験があるほか、日本国内だけでなく海外でも演奏活動をしていらつしやり、教会音楽とその文化についてお詳しいと思います。各国のオルガン事情や、教会音楽の中で、聖公会の礼拝音楽が、例えばカトリックや他のプロテスタントの礼拝音楽と比べてどのような違いがあるのかをお話しいただけますでしょうか。

●崎山 実は現在、ヨーロッパの教会というのはほとんど衰退しているんですね。取り残された大聖堂などの建

物や大きなオルガンは、違う目的のために使われているところも少なくないというのが現状です。オルガニストは国家資格をもつプロフェッショナルな仕事なのですが、その人たちの中にも「私はクリスチャンじゃない。仕事として割り切っている」と公言する人もたくさんいて、びっくりしました。町の教会では高齢化が進んで、聖歌隊も礼拝も年々規模が縮小しています。そうして機能しなくなった教会は、美術館になったり、パフォーマンズをする舞台として使われていたり、貸しホールのようになっています。

ただ、そういう中でもなんとかオルガンを残したいという一部の人の熱意で、コレクト・コンサートというのですが、例えばお昼の時間や週末にオルガニストがオルガンを演奏し、聴きに来た人が思い思いのお金をかごの中に入れていく。それがそのまま弾いている演奏者への謝礼になるといふ催しがあちこちで開かれています。

ドイツはルター派とカトリック、スイスはカルヴァンの改革派が主流ですが、カトリックやバプテスト派なども共存しています。たくさんの宗派があるのはアメリカも同様です。イギリスはもちろん聖公会が一番強いけれども、アイルランドはカトリックというふうに、国によって中心的な宗派が違います。それによって教会音楽

の内容は異なります。オルガンはそれに合わせて設置されていますから、出てくる音が違うのです。例えば池袋のチャペルに設置されているオルガンはドイツのベッケラート社製ですから、バッハが弾けるようにということとでバロックを意識しているということもあります。まるでドイツ語同様の子音の強い音を出します。

ルター派の礼拝で歌われるコラール、つまり讃美歌はハーモニーではなく、全員一致のユニゾンと言って、旋律のみを力強く歌うというのが基本です。もともと無伴奏で歌っていたのですが、会衆が全員で大きな讃美をつくり、「一致する」というのがすごく大切な根っこなんです。ドイツのオルガンにはユニゾンを支え、さらにあおるような強い音が必要とされるんです。

●高橋 合唱というと、われわれは調和ということを考え、周りをよく見て自分だけが勝手に抜きんでないようにしますよね。ルター派はそうではないんですよ。個人個人がそれぞれ思いきり突出し、最高に突出した同士が合わさるのが「調和」とされるんです。

それはドイツの人々の日常生活でも見られる傾向です。音楽はもちろん、考え方や議論の仕方など。周りを配慮して何も言わないというのは駄目なんです。自分の思っていることを率直に思いきり言って、思いきり言い



〈写真1〉 諸聖徒礼拝堂のオルガンのストップ



合う同士でもって、思いきり言ったところに調和がある。ですから、合唱というのはドイツ的な意味で理想的なコミュニティの比喩にもなります。

● 崎山 イギリスの教会音楽は何が違うかというところ、聖歌隊が最初から中心に

あって、オルガンは支える役割です。そういう伝統がずっと続いているんですよ。

● シヨウ 歴史的なことを言うと、イギリスはもともとカトリックの国だったので、会衆が歌う場面がなかったんですね。それが宗教改革を経て、全員が歌うべきだということになった。ただ、聖歌隊は大好きだから残したい。そこで教区の主教座がある大聖堂、そして大学のチャペルでは必ず聖歌隊がリードするという伝統が生まれたわけです。オルガンが前面に出ると聖歌隊が聴こえなくなるので、あくまでも支えてカラーをつける役割です。

ですから、イギリスの教会音楽の文化ではドイツのオルガンを使うと礼拝がなかなか成り立たないんですね。

● 崎山 イギリスでとても驚いたことがあります。オルガン演奏では、音色を切り替えるためにストップ（写真1）というノブ状の装置を使います。聖歌隊の歌をオルガンで伴奏するとき、いろいろなストップを出して莫大な音をつくっているのに、オルガンが歌の邪魔をまったくしていません。強弱をつけるペダルを巧みに操って、裏ではオルガンの音がわあつと鳴っているけれども、決してうるさくはない。逆に歌っている言葉がひとつひとつ際立つんですよ。しかも、英語のひとつの単語、ワン・フレーズに対応して鍵盤を変えて違う音を弾いているのです。この奏楽技術には圧倒されました。本当に言葉が大事にしているんだという、オルガン奏楽の伝統が伝わってきましたね。

### 立教で受け継がれるイギリス聖公会の伝統

● 長野 イギリスの教会音楽について、スコット・シヨウ先生にもう少し詳しくご解説をお願いします。イギリスには観光で行く方も多いと思うのですが、教会を訪れて礼拝音楽やコンサートが行われていたら、どんなとこ

ろに着目すべきでしょうか。

●シヨウ イギリスの特徴というか、世界でもこしかなというの、コーラル・イーブンソング、つまり唱詠晩禱の伝統です。大聖堂や大きな教会のある町ではどんな田舎でも、夕方の五時半になると、夕べの礼拝が行われます。そこでは聖歌隊によって世界トップレベルの歌が提供されるのです。いつもそんなに会衆がたくさん集うかという、時には二人、三人しかおらず、聖歌隊のほうが多い場合もあります。それでも何百年と続いてきていることですから、豪華な礼拝が毎日のように捧げられています。ケンブリッジやオックスフォードでは、三十を越えるカレッジそれぞれにチャペルがあり、全部ではありませんが、そのほとんどに聖歌隊とオルガンがあります。オルガニストも聖歌隊も司祭たちも一番エネルギーを注いでいるのが、毎週何回か行っているイーブンソングなんです。

●崎山 もともととは修道院の日課の中で行われている夕方の祈りを、聖公会は歴史的に続けています。立教の池袋チャペルでもそのイーブンソングが行われているんですよ。授業期間中、毎週金曜日の十七時三十分からです。聖歌隊付きのイーブンソングが毎週あるのは、日本では立教だけではないでしょうか。オルガンの音色と聖歌隊

の歌声に導かれてふらっと立ち寄られる学生や一般の方もいらっしやいますよ。

●シヨウ 立教の聖歌隊は、イギリスの聖歌隊と交流をしています。もともと修道院は毎日九回の礼拝を行っていました。それが宗教改革以降は朝と夕だけに絞られるようになった。伝統的には聖歌隊は毎朝、毎晩歌うべきだけれど、それを維持するのは難しいことです。大聖堂以外の、ほとんどの大学のチャペルは週に二回、多くても三回ぐらいしか歌っていません。立教の聖歌隊が、ヨーロッパの伝統に勝るとも劣らず、金曜日の朝と晩、毎日曜日の朝に歌っているのは、誇りとするべきことです。イギリスの伝統が、九十年も前から日本というノン・クリスチャンの国の、ほかならぬ立教の中で生きている。不思議な、そして貴重な宝物ですね。

立教の聖歌隊は、ここところ隔年でイギリスへ勉強を兼ねた演奏旅行に行っています。レッスンを受け、一流の聖歌隊の歌声をたくさん聴き、オックスフォード大学の聖歌隊とは一緒にイーブンソングを捧げることになっています。オーガニスト・ギルドも同行して、あちらで実際にオルガンに触ってレッスンを受け、聖歌の伴奏を聴くことで、何か熱い、燃えるものを感じて帰ってきます。

●崎山 その国の曲というのは、その国の空気とオルガンの音のために書かれているので、実際に弾いて音を体感してみるのが一番いい勉強なんですよ。極端なことを言えば、立教のベツケラー・オルガンでイギリスの音楽を弾いても、実は何も理解できていない。ベツケラー・オルガンにはバッハやドイツのバロック音楽が一番ふさわしい。例えばイギリスの音楽を学びたいれば、イギリスに行つて、その曲が書かれた時代につくられたオルガンで弾くのが最適なんです。学生たちは非常に恵まれた体験をしていますね。

### アジア初となる池袋のオルガン、

#### コンサートへの充実が期待される新座のオルガン

○長野 新しく設置されるオルガンの特徴はどういうものでしょうか。

●シヨウ 今回、諸聖徒礼拝堂に設置されるオルガンは、イギリスのティツケル社製のもので、イギリスのロマン派の楽器は、ドイツやフランスの影響を受けながらも、それぞれの影響を受けた上で、十九世紀には聖歌隊の伴奏という独特な伝統を踏まえた新しいオルガン文化として発展しました。会衆が歌うべきという運動が盛ん



スコット・シヨウ

になり、大聖堂が満席状態になってもその歌声にのみならず、聖歌隊だけが歌うときもきちんと支えられる。オルガンにはそういう強弱の幅があることが求められたんですね。音色は、基本的にはやわらかい音色です。例えばトランベットの音を弾いても、音色はドイツやフランスのものとは違います。音量は一緒でも、イギリスのトランベットはまるやかで、ふわっとした感じですよ。それと同じイメージですね。

●崎山 イギリスの楽器は、やわらかい英語の流れに添う音です。立教が入れようとしているものには、8

フイートのストップがたくさんあります。それぞれが違う音色でつくられていて、その8フイートをひとつ使うだけで違う音の伴奏ができるのですが、全部出したときには、またよくブレンドして人間の声と混ざり合うという不思議な特徴があります。

●シヨウ 8フイートの音色というのは、人間の声と同じトーンですよ。高音ではなく低音でもなく、私たちがしゃべっているのと同じ高さの音なんです。弦楽器もどちらかというとならば8フイートです。ピッコロは2フイートで高い。チェロやコントラバスだと16フイートになります。8というとならば、ちょうど普通のピアノが出す音程ですよ。その耳なじみのよさが重要なんです。

●崎山 なぜ8フイートと言うかというと、一番低いパイプの長さが約二・四メートル、つまり8フイートあるからです。半分の4フイートになると1オクターブ上の音が出る。さらに半分の2フイートになると2オクターブ上の音が、8フイートを倍にして16フイートになると1オクターブ下の音が出ます。オルガンのストップ表示は全部そのフイートが基本になっています。

●シヨウ ベッケラート・オルガンは高音がすごくはつきりしていますから、どちらかというとならば硬い印象を受けたいと思います。ティツケル・オルガンは、8フイートが

たくさんあって、さらに高音があり、低音もしつかり感じられるんです。明るい高音が支える、温かいサウンドになるはず。このティツケルのオルガンは、アジアで初めて立教に入ります。

●上田 新座キャンパスは地域密着型キャンパスとして発展してきた歴史があり、聖パウロ礼拝堂でも、地域に開かれたコンサートを多く開催してきました。そのため、今回も礼拝のみならず、チャペルコンサートの充実なども踏まえた総合的なイメージを念頭においていたロマン派のオルガンを設置することになった、と理解しています。

●シヨウ 聖パウロ礼拝堂に設置されるオルガンは、アメリカのフィスク社が製作するフランス・ロマン派オルガンです。フランスは十九世紀に優れたオルガンを生み出した国で、イギリスとの交流も盛んでした。池袋のティツケル・オルガンと同様に、8フイートのストップと低音ストップを備え、全体の響きはイギリスのものより少し強くなるでしょう。池袋の諸聖徒礼拝堂より規模の大きな新座チャペルの響きにマッチします。さらに、このオルガンの性能を活かすために、チャペル後方の入り口上部に台座を新たに造り、そこにオルガンを設置します。現在の新座のオルガンは祭壇の裏に設置されていて、会衆からは見えないのですが、新しいオルガンは、

その美しい姿を楽しむこともできるようになるのです。フィスク社のオルガンは埼玉県内で初となります。

## 「赤レンガとオルガンの立教」を目指して

●高橋 立教になぜこれまでドイツのオルガンが入っていたのか、不思議に思われるかもしれませんが。聖公会はプロテスタントの宗派のひとつですが、カトリックだ、プロテスタントだという枠にも、またキリスト教の信者であるかどうかということにとらわれずに、みんなに

向かって開かれているという考え方があります。教会用語でエキユメニカルというのですが、宗派にとらわれず、閉鎖的ではない考え方で活動しているのです。ドイツから

ベツケラートのオルガンが入った当時は、日本にはまだ、めばしいオルガンがほとんどない時代でした。立教は聖公会のチャペルだけでも、オルガンを導入するというのは、立教にとっただけではない、日本に素晴らし

いオルガンが来るという大きな意味を持っていたんですね。聖公会の音楽、礼拝に使えることももちろん大事だけれども、それ以外の、もっと広くいろいろな音楽が演奏できるということが、コンサートのためばかりでなく、教育的な視野からも重要だったんです。

今回は聖公会の礼拝音楽をきちんと演奏できるオルガンということが一番のポイントに選んだわけですが、オルガンを学ぶという意味で言えば、例えばバッハの音楽やドイツの音楽を無視はできません。ベツケラートのオルガンには立教のエキユメニカルな伝統を音楽において体現するという理念的な意味があるんです。ですから、ベツケラート・オルガンを新チャペル会館に移設して使い続けることには、エキユメニカルな伝統を守り育てる立教を具現するという大切な役割もあるのです。

●上田 チャペルコンサートのときに、「今回は池袋袋だからイギリスの作曲のものが多いな」「次回はフランスの音楽だから新座かな」といった使い分けができるようになるわけですね。

○長野 オルガンを製作し、設置するにはかなりのコストと人手がかかりますが、欧米では寄付が当たり前のようにあるそうですね。ストップに寄付者の顔の彫刻が入れられることもあるのだとか。

●高橋 一九八九年にベルリンの壁が崩壊し、翌年にドイツが西ドイツに統合されたとき、東ドイツでは、教会やオルガンなど、貴重な文化遺産がずいぶん傷んでいました。当時、私が訪れたドレスデンを代表する教会のフラウエンキルヒェに、「オルガンの献金をしてください

長野 香



「い」という箱が置いてあった。私もわずかですが献金しました。そうすると今度はもう一度その教会へ行って演奏を聴くのが楽しみになるんですね。僕のオルガンだ、という気がしてしまふんですよ。そこに設置されて演奏されている限り、オルガンはずっと生きていくわけですよ。さすがに私の顔はそのストップについていけないけれど、自分はその教会やオルガンと、そしてドレスデンの町とも心の絆で結ばれているという感覚を持つことができ、非常に幸せな気分になりました。それで今でも私はドレスデンの町に特別な思い入れをもっています。こう

いう献金というのは一生の宝になるんですね。

●上田 一九八四年に諸聖徒礼拝堂にベツケラート・オルガンを入れたときには、たくさんの方の献金によって実現する運びとなったのですよね。この度ティツケル社のオルガンが入るということは、ベツケラート・オルガンを入れてくださった方々の思いやご尽力を押しつけてしまふということではなく、そこまで引き上げてくださった歴史を今後引き継ぎ、私たちが立教の音楽環境をさらに良いものに整えていく責任のバトンを受け取ったと考えています。ぜひこれらのオルガンを末永く活かし、世界でも希なこの立教の音楽環境を、さらに充実させていきたいと強く願っています。

●長野 二〇一四年に立教学院は創立一四〇周年を迎えます。新しいパイプオルガンと一緒に一四〇周年をスタートできるわけですね。でき上がったときの音を今から楽しみにして待ちたいと思います。

●崎山 立教のオルガン環境をフルに活かしているいろいろな国や時代のオルガン音楽を皆さんに聴いていただきたいと思っています。オルガン曲は、ピアノのレパートリーよりもはるかにたくさんあります。新しいオルガンが完成すれば、それを演奏できる可能性がさらに大きく広がりますから、ぜひ聴きにいらしてください。



●高橋 今後は、もっといろいろな方がオルガンの音を  
経験できる、体感できる環境にしたいですね。すばらし  
いオルガンの響きに包まれた二つのキャンパスは、私た  
ちの心をしっかりと支え励ましてくれるはずです。立教  
と言えば池袋キャンパスをイメージして「赤レンガ」で  
すが、今後は新座キャンパスも加えて、「赤レンガとオ  
ルガンの立教」と言われるようになっていってもらいた  
い。私も大いに期待しています。

○長野 本日はどうもありがとうございました。

(池袋キャンパス ライフスナイダー館にて)  
写真撮影・コミュニティー福祉学研究所 江波戸夕香